SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

№11
2021.07

SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

巻頭インタビュー：溝上智恵子教授（副学長・附属学校教育局教育長）

「千射万箭」～教育の原点こそ、特別支援教育にある～

今号では、今年度4月より附属学校教育局教育長になられた溝上智恵子先生にお話を伺います。

筑波大学附属学校教育局教育長を拝命いたしました溝上智恵子と申します。今年度もCOVID-19への対応といった厳しい状況の中、また教育を取り巻く環境も大きく変化する中で、その重責に身の引き締まる思いです。子どもたちや先生方が安全で豊かな学校生活が送れるよう、附属学校11校の教育研究の充実発展のために精一杯取り組んでまいりたいと存じます。

先生のご経歴を教えていただけますか。

私は筑波大学第二学群人間学類の1期生です。大学卒業後、大学や研究機関で働いた後に、アメリカの大学院に進学しました。帰国後はシンクタンク勤務、その後、長岡技術科学大学、図書館情報大学で教鞭をとり、現在は出身大学である筑波大学で教員をしています。

先生のご研究と特別支援教育に対する思いについて教えてください。

私が在籍していた第二学群人間学類では、大学1年時に、教育学、心理学、心身障害学を通年で受講することが必修でした。そこで、「学校教育というのは、どうしても効率性の点から、集団教育としてやらざるを得ない。けれども本当は、一人一人が全く違う。一人一人にどう教育を提供するのか。それが一番重要なのだ」ということを、心身障害学の先生から繰り返し、繰り返し教わりました。2年生になって私は教育学を専攻しましたが、心身障害学の授業での学びが、その後も私の教育のベースになっています。

研究分野は主に、多文化教育、高等教育政策、カナダの教育政策などです。これまで特別支援教育を主とした研究はしてきていませんが、折々に接点があったと感じています。例えば1990年代、アメリカで注目されていた多文化教育（Multicultural Education）では、人種、ジェンダーなどの問題だけではなく、カルチャーの中には心身の障害がある人も対象に含まれることを、研究する中で学びました。その後、研究フィールドをカナダに移し、カナダの多文化教育のことを調べている時にも、Special Needsの言葉（広義）について、現地の学校の先生方や研究者たちと話がかみ合わなかったりして、議論を交わしたことをよく覚えています。

附属特別支援学校への思いについて教えてください。

附属特別支援学校は、これまで実験的な教育・研究活動を多く進めており、そこで培ったものを全国の特別支援学校に浸透させていくことに、力を入れていく必要があります。色んな可能性が考えられますが、その一つがインクルーシブ教育システムです。「インクルーシブ教育って、障害のある子が通常学校に行っていて、いいね」って議論を聞くとそう感じたりもしますが、誰もがそれでハッピーだったらいいんですけど、そんな単純な話でもないとも思います。だからこそ、附属特別支援学校には、実験学校という性格をフルに活かして、インクルーシブ教育システムについて、全国の学校の先生を先導していただきたい。実験の中でうまくいったものを、半径1m以内だけではなく、1mよりも外にいる人たちにも広く発信することを意識してほしいです。また逆に、全国の特別支援学校の先生方と、失敗やうまくいかなかったところもどんどん共有してほしいとも思っています。「失敗は成功のもと」と言いますが、失敗の中にはヒントが沢山転がっていますし、失敗を周りと共有し、同じような失敗を少なくすることで、エネルギーを別の方向に向けることができますよね。

また、教員の研修と資質向上を推進する附属特別支援学校であってほしいと願っています。その一つとして、私は先生方に、海外のインクルーシブ教育の実態を、実際の現場に行き1年単位で学んできてほしいと考えています。短期間では成功事例しか見えません。職員として現場に入り、1年通して過ごすことで、ようやく失敗や課題も含めた全体像が見えてきます。全てを知り尽くした上で、日本のインクルーシブ教育システムにそのノウハウを取り入れていくことが大事です。そのためにも、教育長として私が先生方にこのような研修を受けられる仕組みと機会を考えなければならないとも思っています。

*　*　*　*　*

おわりに

大学時代に弓道を始められ、関東代表チームとして伊勢神宮に行かれたご経験もある溝上先生。インタビューを終え、弓道の心得となる言葉を思い出しました。「千 射万箭（せんしゃばんせん）」。千本、万本の矢を射る場合でも、一本一本新たな気持ちで、丁寧に、そして真剣に射ること。一人一人の子どものために、一本一本の矢に思い込めることの大切さを改めて感じました。

（聞き手：佐藤北斗 / 敬称略）

附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

「素敵だなぁ!」が子どもの心を動かす

～音楽療法的視点を取り入れた音楽の授業実践～

山縣　根岸先生は、日本音楽療法学会による音楽療法士の認定資格をお持ちですが、学校での音楽の実践の中でどのように音楽療法的視点を取り入れていらっしゃるのでしょうか?

根岸　本当に沢山あるのですべてはお伝え出来ませんが、例えば伴奏では、いわゆるクラシックの演奏家ですと作曲家の意図通り、つまり楽譜通りに弾くことを要求されます。でも音楽療法では「相手のことを知り、相手に合わせる」ということがとても大切です。音楽療法士はそのトレーニングを最も受けます。子どもの状態に合わせたり、子どもの表現を更に引き出せるような伴奏を工夫したりしています。

附属大塚特別支援学校　根岸 由香 先生

厚谷　根岸先生の伴奏で歌うととても歌いやすいのは、そのせいなんですね。

根岸　ありがとうございます。私はいつも厚谷先生の息を吸うタイミングに合わせて伴奏するようにしています。それによって、より声が出やすくなっているんだと思います。

厚谷　一昨年度行われた教材・指導法コンテスト最優秀賞（木村賞）を受賞した『くねくねマラカスフォーマット』の曲や音楽の授業の中でも根岸先生のオリジナル楽曲が多く使われていましたが、オリジナル楽曲にこだわる理由は?

根岸　授業の中では、できるだけ教員による説明を省き、子どもの活動量を増やしたいと考えています。そのため、目的とする行動をそのまま歌詞にした歌を作ることにより、それを歌い、子どもたちも先生たちも、その歌詞通りに動けばいいようにしています。音楽に合わせて体を動かしたり、繰り返しを多用したりすることによって、言葉の意味や概念の理解を深めていくというねらいもあります。
作曲の面でいうと、カノンコードのような心理的な安定をもたらすといわれている音の組み合わせを用いたり、スペイン音階、沖縄音階など不協（和音）になりにくいという民族音楽の特徴を取り入れたりなど、「音楽の持つ機能と構造」を意図的、計画的に活用して作曲しています。

根岸　オリジナル曲を用いるのは、自分で作ることによって、自分のねらいたいことに 最も合った教材にできるからなんです。

株式会社音楽之友社 Web　マガジン「ONTOMO」より https://ontomo-mag.com/

山縣　根岸先生が音楽という教科を通じて子どもたちに伝えたいことや、音楽という教科の中で大事にしたいことは何ですか?

根岸　障害の軽重に関係なく、「音の変化を聞き分けて、自分なりに表現してほしい」と思っています。それが音楽という教科の中での「主体性」だと私は考えています。ですから、どんな発達段階の子どもでも授業に参加できるような授業づくりを心がけています。
それから、私は一緒に授業を行う先生たちには「素敵に歌ってください」「カッコ良く踊ってみせてください」といつもお願いします。人間は「わあ!素敵だな!」「かっこいいな!自分もやってみたいな!」と心が動いてこそ、行動が活動になると考えているからです。ですから、子どもたちの主体性を育むためにはそういった心が動くような「感動体験」が必要で、先生たちにはそれを子どもたちに与えられるよう素敵に演じてほしいのです。
また、子どもたちには「本物」に触れてほしいと思っています。私が生の演奏や伴奏にこだわるのも「本物」が持つ力、振動感覚や迫力は、必ず子どもの心を動かすと考えているからです。

厚谷　今後はどんな音楽の授業を考えてらっしゃいますか?

根岸　表現活動として、音楽だけではなく造形活動やインプロビゼーション（即興劇）といった要素を取り入れた授業を考えています。音や色といった身近なものから言葉に広がり、子どもの感性を育て、豊かな創造性につなげていけるといいなと思います。

＊　＊　＊　＊　＊

重度の子どもたちとの関わりから、その人なりの「表現」が様々にあることを学んだという根岸先生。「一単位時間ごとを切り取った評価だけでは見えにくい子どもの成長もあることを絶対に忘れないようにしたい。」と最後に話してくださったことも大変印象に残りました。

（聞き手 / 厚谷秀宏・山縣浅日）

根岸先生の音楽の実践を更に詳しく紹介している web サイトもご覧ください。
https://ontomo-mag.com/article/report/yuka-negishi-seminer20170721-01/

令和2年度 特別支援教育研究セミナーについて

令和3年3月24日(水)に、筑波大学人間系インクルーシブ教育システム開発リサーチユニットと当グループ共催で「特別支援教育研究セミナー」をオンラインにて開催いたしました。

今回のセミナーのテーマは「インクルーシブ教育システム下における特別支援教育の専門性の活用」でした。前半は中野泰志氏（慶應義塾大学教授）に「一人一人の子供の学びを支える指導・支援の実際」について、合理的配慮と自立活動の関係や ICT 活用のあり方、GIGA スクール構想、インクルーシブ教育システム下での特別支援学校の果たすべき役割と期待等、最新の動向を踏まえながらご講演いただきました。後半は、附属特別支援学校5校からそれぞれの学校での実践発表が行われました。

年度末の開催でしたが、当日は全国から多くの方にご参加いただき、講演・実践発表ともに登壇者と参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。セミナーを通じて、これからのインクルーシブ教育システムの推進とさらなる発展を目指し、特別支援学校が蓄積してきた専門性の活用について、個々の学びを深める有意義な時間となりました。

今年度も、特別支援教育研究セミナーを開催の予定です。詳細は決まり次第、当グループの HP 等でご案内いたします。多くの先生方のご参加をお待ちしております。

令和３年度 現職教員研修について

当グループでは、特別支援学校及び特別支援学級等に勤務する教員の資質の向上に貢献することを目指し、特別支援教育における指導法の専門的知識と実践力に優れた教員の養成を目的として、現職教員を対象にした研修を実施しています。
本研修では、附属特別支援学校5校（附属視覚・附属聴覚・附属大塚・附属桐が丘・附属久里浜）での実践実習や筑波大学人間系障害科学域教員等による講義、当グループでの演習等を組み合わせ、研修生のニーズに応じた多様な研修プログラムを実施しています。

本年度は長期研修生（1年間）として、小谷明日香先生（北海道小樽高等支援学校）、福島健介先生（鳥取県立皆生養護学校）の2名をお迎えしました。4月に行われた開講式では、これからの研修の抱負について述べられました。秋には附属学校での実践実習を中心とした短期研修生（1ヶ月間）も2名お迎えする予定です。

研修の様子については、当グループのHPに随時掲載していきます。また、夏には全国の特別支援学校に次年度（令和４年度）の現職教員研修の募集要項をご案内する予定です。ご関心のある方は、当グループまでお気軽にお問合せください。

筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベースについて

筑波大学特別支援教育教材・指導法データベースでは、附属特別支援学校5校の先生方が普段授業で活用している教材・指導法を web上で発信しています。2021年6月の段階で432教材を掲載し、英語版についても 76 を超える国・地域からアクセスをいただいています。

データベースでは「どのような子どもに」「どのような指導で」使用しているのか、指導の意図や期待される効果等を紹介しています。中には、実際の指導場面の様子を画像や動画で紹介しているものもあります。

「障害種別」での検索、国語・音楽等の「各教科別」の検索、特別活動等の「教科以外の場面別」検索はもちろんのこと、フリーワードでの検索も可能です。そのため、どのような指導がしたいのか、子どもがこのような難しさを示している等、複数の視点から教材を探すことができます。

データベースに紹介している教材の多くは、身近にあるものをちょっと工夫してみました、というものです。掲載教材を見ていただきながら、担当している子どもの実態やねらいに応じて、例えば素材の種類を変えたり、大きさや重さ、厚み等を工夫したりしながら活用してみてください。

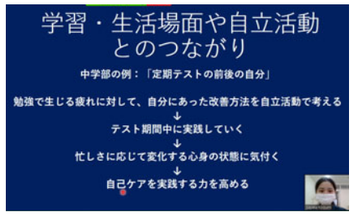
データベースは随時、新規の教材を掲載しております。また、より検索しやすく、ご参考にしていただけるように改修を進めています。「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」を皆様の授業に是非ご活用ください。

令和３年度 5附属連絡会議より

令和3年度の5附属連絡会議のテーマは「つなぐ、創り出す、～発信へ！～」です。年間7回の開催を予定しています。

第1回（5月13日）では、Zoom にて各附属学校の構成員から自己紹介と学校の近況報告、連携推進グループからはグループ員の自己紹介と主な事業紹介、そして、1年間本グループで研修に取り組まれるお二人の先生の自己紹介を行いました。

そして、第2回（7月８日）から連続3回で各附属学校の実践発表を行います。初回は、「附属久里浜特別支援学校　寄宿舎の取組」「附属桐が丘特別支援学校の自立活動～本校中学部の授業より～」です。その後、附属視覚、附属聴覚、附属大塚とつないでいきます。通常の5附属会議は、構成員とグループ員とで行いますが、この実践発表には、附属学校の先生に広く参加を呼び掛けています。互いの取組を知り、しっかりとつながっていきたいと思います。



また、本グループの「教材・指導法データベース」の教材について、他障害の幼児児童生徒に活用できないか、汎用性について検討するための学習会を2回設定しました。「教材・指導法データベース」が更に多くの特別支援教育に携わる先生方に、効果的に使っていただけるように進めていきたいと思います。

編　集　後　記

筑波大学特別支援教育連携推進グループでは、特別支援教育に携わる全ての方の懸け橋になれるよう、附属特別支援学校５校から派遣された教員が協働し、様々な事業を展開しています。掲載記事を通じて、当グループに関心を持っていただいた方は、ぜひ HP もあわせてご覧ください。夏の青空に向かって元気よく伸びるひまわりのように、私達も「SNE-T」を通じて皆様のお力になれるような情報をこれからも発信してまいります。

（竹田　恵）

今号の表紙は新しい校舎になった附属桐が丘特別支援学校です。真新しい校舎は光が沢山取り込まれ、明るくゆったりとしていました。撮影にご協力いただきました附属桐が丘の皆様、ありがとうございました。
また、今号の実践報告では音楽之友社様から素敵な写真をご提供いただきました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

（厚谷秀宏）

エスネット11号（通巻 第59号）2021年7月21日発行
発行／編集：筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
電話：03-3942-6923・6937　FAX：03-3942-6938
e-mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp
http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/

©2021 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）